第５回 将来ビジョン検討会議 意見交換概要

（出席者）

・企業経営の傍ら、３年前から県の経営革新の認定をいただき、「オレボ・ビズスクール」という教育事業を始めた。その具体的なお話を紹介させていただく。

・経営者の友人との話題で多いのが、新卒で入社した社員がすぐに辞めてしまうこと。高校生は３年以内に５割が辞めていく。今年などは特に就職内定率が厳しいので、商工会議所、経済同友会、経営技術協会等から採用依頼がたくさん来るが、職業系高校の生徒は採用したくないというのが本音である。

・資格、資格と言われるが、企業の経営者はあまり資格を重要視していないというのが共通するところである。一昔前までは、「商業科で簿記を学んだ生徒は間違いない」と金融機関のトップが言っていたが、最近はそうでもないらしく、地元の建築科を卒業した生徒も建築会社の社長曰く、「採用しても何も分かっていないので、採用していない」と平気で言う。実際、その建築科の生徒の進路をみても、建築会社に就職した生徒は一人もいない。

・なぜそうなったのかというと、企業の求める社会人像と学校教育を経て卒業する生徒にギャップがあるのである。ではどんな社員像だったら求められるのか。自分の頭で考えることができ、コミュニケーション能力があり、自らアイディアを出す力があることである。

・この状況をどうしたらいいかということで、教育事業を立ち上げ、一種の社会実験として県内の高校で「ラスカは“感動”ステーション」を題材に１時間半～２時間のディスカッション型授業（ケース・メソッド）を行っている。

・私たちを含め、生徒は学校の授業で鍛えられ、答えを出すことは得意だが、実社会では答えのないような難しい問題が山ほどある。誰も習ったことがないものにどう対処したらよいかである。

・題材となっている「ラスカ」とは平塚市にあるショッピングセンターで、日本一接客がいいと言われている。研修制度が素晴しく、新入社員になる際、入館証をもらう際、それぞれに厳しい研修があり、遅刻は一切認めないという徹底ぶりである。

・その授業で学生さんへ「あなたがアルバイトだったら、ラスカとエルパとどちらで働きたいですか？正社員だったらどうですか？」という質問をするとおよそア

ルバイトでは楽な方で働きたいという結果で、正社員の場合は人によって違う。

・これを皮切りに１時間半ほどディスカッションを行うのだが、最初は遠慮しがちで手が挙がらないが、終わる時には皆が何回も手を挙げて発言するようになっている。この授業の中から、職業観、「お客さんの立場では接客のいい店がよく、働く立場では楽な方がいい。お客さんと働く側では１８０度勝手が違う」ということを見出していくのである。

（司会）
・高校の話が出ましたので、どなたかいかがでしょうか。

（出席者）
・とても耳の痛い話であった。特に職業系の子どもたちの離職率が高いことで、福井県の場合３割強であったと記憶している。全国と比較すると低い方であるが安心するわけにはいかない。生徒が就職した会社を訪問し、生徒の様子を伺い、企業がどういう人材を求めているのかを聞くと、成績、資格よりしっかりと挨拶が出来る、服装がきちんとしていること等が求められている。

・先ほどのスピーチの話と絡めると、希望は学校教育の進路指導に重要な関わりを持つ。希望、将来の生きがいをどのように持たせるか、引き出すかが大変重要である。

・進路指導については、様々な工夫を行っている。どの教員も生徒に途中で変わってもいいので早く希望を示すよう指導している。そうして気持ちを持続させることで先が見え、自分なりの方向性を見出すのではないか。

・進路指導と同様に重要視しているのがクラブ活動である。辞めると生活が安定せず先が見えにくくなるため、途中で挫折させないようにしている現状である。

（司会）
・先ほどの意見の中で、感動という言葉が一番大きく出てきますが。

（出席者）
・たまに中学、高校で話しをする機会があるが、挨拶、コミュニケーションは大事だという話をする。「ありがとう」は小さな感動を表す言葉で、ありがとうで様々なものが見えてくる。

（出席者）
・先ほどのスピーチで「勘」というのがあったが、勘で答えることが苦手になって

きている。ケース・メソッドで「間違ってもいいから思ったことを答えなさい」と言っても最初のうちは、「間違っているかも」と思ってしまう。そのような思考回路が出来上がってしまっている。それを「勘でいいから言ってごらん」というと答え出す。強く縛る部分と解き放つ部分を上手に作ってあげないと心を開くことできない。学びが広がっていくポイントに「勘」があるかもしれない。

（司会）
・ここまでで何かご意見ありましたら。

（出席者）
・私が藤島高校の校長だった時、県の政策で学校が冷房化した。私たちの時とは時代が全く違っている。冷房するということは、一方で子どもたちの耐性、我慢が奪われている。このような社会変化に対応する教育はまた別の機会に行わなければならないのではないか。例えば地元の山に登って汗をかかせ、同時にふるさとについて今一度発見する。乱暴な方法で言うと、１週間から１０日間山にこもってキャンプをし、自分で何か食べるものを探すというような原始生活に還る体験など。このような体験から「勘」や「感」が育つ。もう少し剛健な生徒を作る機会を学校教育、地域の中でセットしていくことも必要でないか。

（出席者）
・先のスピーチで「ユーモア」が大切だという話があったが、私も常々そう思っている。「ユーモア」とはある意味対象から距離を置く能力でもある。少し角度を変えて斜めから物を見ることで笑いが生まれてくる。

・オリンピックのスノーボードの國母君の問題があったりするが、服装をきちっとした方がいいのはその通りである。皆さん男性はネクタイを締めているが、なぜネクタイを締めているのかというと何の機能もなくこれといった理由はない。皆が締めているから締めている。ネクタイが正装であるというのは、皆が共有している偏見でしかない。

・福井県民は「まじめでこつこつ」という文化があるので、逆に、感動、ユーモアといった時に、「そんな物事の見方もあるのか」というように斜めから物事を見るとよい。

（司会）
・将来ビジョンということで、人間像で何か一つまとめていかないといけませんので、私から質問をさせていただきますと、１０年先を見据えて将来ビジョンを策定するのですが、この１０年間で学生が変わってきているのかどうか、具体的に気づいた点がありましたら教えていただきたいと思います。

（出席者）

・「こんなことやってみたい」という意欲は、程度の違いはあるがどの時代の生徒も共通して持っている。先生がどうポートし実現していくかが重要である。

（出席者）

・福井県出身で福井県立大学へ入学する人は半分くらいいるが、やはり特殊だと思う。皆地元大好きで、その傾向が強まってきている。

・携帯電話が普及して小さなグループの中での微妙な人間関係に日々気を使って暮らしていると感じる。

（出席者）

・十数年前、福井県の各高校から数名ずつ生徒を集めて文化事業を行った。日華化学の社長も出席されたのだが、生徒の「日華化学はなぜ東京に本社を移さないのですか」の質問に対して３つ理由を答えた。情報化の時代だからどこにいても事業ができること、交通が便利になってきていること、最後にこれが重要だと強調されたのだが、東京では人材を集めるのに非常に苦労するが福井には素晴しい人材がたくさんいること。この最後の答えに生徒たちは感動しドッと沸いたことを覚えている。

（出席者）

・本人が本気になるのは、自分が主人公の時である。スクールでは屋台で何か商品を販売することを企画してもらっている。事業計画を立案し、パネルディスカッションし、事業計画を出して、実施するわけだが、あるチームは冬だからということで焼き芋屋を企画したが目標の２割も売れず、売れなかった芋の山と、支払いのできない仕入れの請求書が残った。勿論、人件費も出なかった。

・時給１００円でももらえることはこんな貴重で、赤字が出れば時給どころか自分の貯金を取り崩してでも支払わなければいけないということを学び、こんなに楽しいことはないと生徒は一所懸命になった。

・座学やディスカッションで学んだことを現場で実践する学びの検証、教育と営業販売の世界は別だが一つにして行うことを何か取り入れて生徒が本気になれるような仕組みを作るとよい。

・このようなことは武生商業が「武商デパート」として実践している。また、先進例で言うと、慶應大学の先生が指導している佐賀商業では、生徒数名でチームを作り、事業計画を立案し、その計画に対して地元の銀行の融資担当が５万円程の

金額であるが実際に融資をしている。このスキームは教育委員会が作っているのである。

・詰め込みで教えられたことを何とかこなして試験で点数を取る勉強も必要だが、職業系高校のカリキュラム再編が言われている中、本当の学び、生徒自信が主人公となり実際にやってみるようなことを一部取り入れて実施すると良いのではないか。

（出席者）

・今の話を着眼点として、１０年後を見据える意味で私なりに提案する。ここ２０年位で若者が経験し難くなったことの一つは「成功体験」であろう。今不況で、仕事で成功することが難しくなってきており、次に進んでいく時のエネルギーが持ち難い。

・もう一つ実は持ち難くなっているものは「失敗体験」であろう。これは少子化の影響もあり、一人っ子の少子化となると、当然親として我が子に「何とか失敗なく人生を歩んで欲しい」となる。

・希望学の調査をして分かるのは、失敗それ自体は痛いものであるが、長い間おくと薬になる。また若者には失恋経験もなく、恋愛に希望が持てなくなっている。

・ここで提案であるが、１０年後「福井県って自分なりの成功体験と失敗体験を語れる人が多いよね」となったらいいのではないか。成功体験を事実として謙虚に語る。この謙虚に語るというところに現在の福井県の良さが活かせる。また、もう一つは自分なりに失敗体験を失敗と距離を持ってユーモアを持って語ることができる。この両方があると次に続くと思う。

（出席者）

・世の中の価値観が大きく変わって、共働きが多い、出生率が高い等意図せずして福井県の価値が高まったイメージがある。その中でどうあるべきかというと、例えば、女性の社会進出を考えることはいいことで、女性の管理職を増やそうとしているが、経済同友会のアンケートによると女性社員の７割は「管理職になりたくない」と回答している。

・「私は夕方には家に居てご飯を作り、子どもと時間を過ごしたい」といういい価値観がある。いいものが世の中の流れの中で評価されないことがあるかもしれないが、それが福井県の良さ、競争力であるならば今後変えてはいけない。

・「希望」、「幸福」、「夢」は、自分が起こすアクションの反作用である。何も動か

なければ成功体験は生まれてこない。そのためには、教育の中で、勉強と体力だけではなく、様々な評価軸で生徒全員を評価し、アクションを起こさせるようにするべきである。

・「福井県は地元志向が強い」という話があったが、私はそうは思っていない。小さいころから福井を大好きにする導きが必要である。

（出席者）

・福井県の特徴である、共働き、三世代同居は、時代の先を行っているのか周回遅れでそうなってしまったのか中身を分析していかなければならない。

・コミュニティの再生を考えるとき、人間は命と文化をリレーしていくものだと思っている。地域に誇りを持って根ざし頑張っていく人間を育てていかなくてはならない。その意味ではいい方向に向かっていると思う。

・「成功体験」、「失敗体験」であるが、私たちの時代は、部活動の先輩、後輩関係のミニ社会があり、その中で鍛えられ勉強した。恋愛も擬似体験を通じて学び、学校を卒業してからは地域社会の青年団等で受け継いできた。要するに人間社会をトレーニングする場があったのだが、今は部活動をみても専門化してしまい、無くなってきているような気がする。

（出席者）

・「福井はトップランナーか、周回遅れか」についてだが、福井の地理的位置が特殊であることが関係してくる。家族が近くに住んでいることで出生率を上げる、地域が活性化しているなどの素晴しい機能を果たしているが、素晴しいからといって、これを意図的に東京や他県で行おうとしても出来ない。福井の地域の特性に根ざしたうえで成り立っていることである。

・日本中で伝統的にそうであったものがまだ福井に残っているのは、福井の特殊性である。しかしながら、そのまま残っているわけではなく、現状に適応していく中で、福井型として残った。伝統は時代に適応する中で日々作り変えられていくものである。

（出席者）

・午前中に福井の経営者の方と話しをさせていただいて、なるほどと思ったのは、アクションの部分であるが、「成功の反対は何か」というと「成功の反対は失敗ではなく“何もしないこと”」である。考えてみれば「失敗の反対も“何もしないこと”」であろうと強く思った。

・希望学の中で希望とは何かというと、英語であるが、「Hopes are wish for something to come true by action」である。「願い」、「具体的な何か」、「実現すること」、「行動」であり、「希望がない」とすればこれら４つの柱のうちどれか一つでも欠けている状態であろう。

・１０年後のワークに「アクションする福井」とあってもいいが、気をつけなれければならないのは、「アクションしろ」「アクションしよう」と言っても誰もアクションを起さない。県、市町職員の方がまず何かアクションすることからしか始まらないと思う。

・この１０年間でベテラン世代、仕事をリタイアし、新しい人生のステージを開く方が中心になってアクションすることが、大事なターニングポイントになるだろう。自分の思い、経験を語ることを含めて、一人一人が自分にとってのアクションをとり、それが何かを考えることが大事である。

（出席者）
・部活動についてであるが、福井県の場合は比較的入部率が高い。私が校長を務めた高校では８５％、また別の高校では９０％を超えていた。勝ち負けに比重が移っている部分はあるが、人間育成に大きな影響を及ぼすし、勝ち負け等の成功、失敗が如実に経験できるだろう。

（出席者）
・コミュニティの話をもう少しすると、昨日、若狭町長さんと話したが、年間２２０人亡くなり、１２０人生まれる。要するに１００人ずつ減り限界集落が１０以上あるそうだ。世帯が核家族化し、成功したものは都会へ出て行く。この状況はどうなのかなという気がする。

・ドイツは、大都会がない代わりに過疎地もない。マイスター制度のような文化があって職業が代々変わらず、保守化しているのが良いかどうか分からないが、取組む方向性として何か参考にできることあるのではないか。

（出席者）
・人は本当に困った時に知恵が出る。今全世帯の１／５以上が単身世帯で、若い方もいれば年配の方もおり、実際健康のことを考えたとき厳しい面もある。家族の大切さと同時に、他人による新しい生活単位がきっと生まれてくるであろうし、そういうものがあればいいと思っている方が増えているのではないか。

・実験的な段階ではあるが、都会に他人とは違う、共同生活をしつつお互い困った時に助けあうような社会があると伝え聞く。これから一人で生活する中で、他人、

家族を超えた新しい共同体ができていくだろうし、望む方が多いとすればきっかけをどういう形で作っていくのか。他人による緩やかな繋がりが生まれていくのではないか。

（出席者）

・私の町内は、２５５世帯６６０人住んでいるが、３５％が高齢者、１０％が子どもで、少子高齢化の典型である。高齢者で一人暮らしの方には近所で一人ずつ支援員を決め、雪が降ったときの除雪員３人を決め配置している。

・また、町内だけの防災訓練を３年連続で実施し、さらに緊急連絡先を作成し各戸に冷蔵庫に貼ってもらっている。このように、町内で助け合っていかないとこれからの少子高齢化には対応できないのではないか。

（出席者）

・福井県は、学力・体力日本一で、これは、福井の素晴しい環境から生まれたのであろうが、これだけでは物足りないと感じている。将来の新しい人間像を共有しつつ、創造性を伸ばしていくために、どのようにしていくかをもう一度考える必要があると感じている。

・「ユーモア」と「タフネス」、「絆」の話であるが、「自立」と「人間関係の発見」をどうバランス良く考えていくかである。学力・体力もあるが、基本は人間力をどう作っていくのかということではないか。

（出席者）

・福井県の学力・体力が全国的に優秀であるということは、三世代同居と大きな関係があると思う。おかあさんが働いていても、おじいちゃん、おばあちゃんが挨拶等の躾、朝ごはんを食べることなど、人間の社会生活の基礎を教えている。この良さが昔は日本全体に残っていたのだが、崩れずに残っているのが福井県である。日本から失われた良さが福井県に残っていることを誇りに思うことが大事である。

・いかに成功体験、失敗体験に対して行動するかにおいて、「評価」の問題が大きい。点数とは違う切り口で、その人間が何かに対して一生懸命やったかどうかを評価にする。何か自分が興味を持ったやりたいことに一生懸命取組むことを学校、家庭、地域、行政も含めて認めてあげることが非常に重要である。

（出席者）

・今の教育課程にどう組み込めるかである。キャリア教育等必要でないかという気がする。

（出席者）

・決められた中でタイトに動いていることは分かるが、何かグループごとに自主独立したような活動を認め、それが地域の方と交わるような、佐賀商業、武生商業のようなカリキュラムを常の勉強とバランスよくミックスしたらといいと思う。

（司会）

・将来のビジョンなので、できるだけたくさん若い人の意見を聞くよう知事が常々言っています。２０３０年のメンバーと市町の職員の方お一人ずつから聞きたいと思います。地元志向のことについて２０３０年のメンバーででどなたかどうでしょうか。

（参加者）

・私は福井が好きで、このことをどうやって広めていけるかだが、私自身子どもがいるので、子どもや周りに伝えていくことが大事であると思う。

・また、もともと地縁・血縁で行っていたものが、子どもの繋がり、例えば、地域での子どもの活動から知ったことや、最近地域の高齢者が子どもの見守り隊に参加されているが、その繋がりから子どもや高齢者から教えてもらったことをまた広げていく。このようなことを２０３０年の作成中に議論した。

・私の体験談から言うと、私も三世代近居の一員であるが、今別の地域に住んで新年会に参加したところ、私が通っていた小学校で先生をしていた方やその小学校の校医の息子さんがいて、それこそ「ウィーク・タイズ」というか、それだけでその地域が好きになり、子どもたちにも伝えていきたいと思う。このような地道なところからアクションを起こしていくことが大事ではないか。

（出席者）

・私は１０年間位福井を出ていて、市役所への就職を機に久しぶりに福井に帰ってきた。小さい頃から福井を出たくて、積極的に戻ってきたわけではないので、その意味を見出せないでいる。

・自分の生まれた場所であること以外に福井でないとダメという必然性が感じられず、これからゆっくり探していきたいと思っている。

（参加者）

・昨日、県内の市町を調査で廻った時、二宮金次郎像を発見し、「あっ、二宮金次郎像がある」と言ったら、「そんなに珍しいことですか」という反応であった。私が生まれた東京では死滅していて、像があることに驚いたのだが、教育や学校

の持つ意味が明らかに東京とは違うのだなと感じた。

・福井の良さを伝えていこう、次の世代に何を考えるべきかを強く自覚し、政策に反映していこうという意思が感じられる。私が面白いなと思ったのは、すぐに、では教育改革をしようとか、道徳教育をしようということではなく、もう少しハード面から行くというか、コミュニティを何とかしようとか、文化館を作ってみようとか、少し違う面に思考がいき、ある種古くもあるが完全に昔ながらの形でなく、新たな形で仕掛けていこうとしていることに現代的な印象を持った。

（出席者）

・ある種福井と距離を持って付き合っているのはいいこと。福井のまじめさが大好きだけどある種おかしみとしてとらえる、福井が大好きだけど距離を持っている。福井の人でありながら福井の人でないという中途半端なポジションをぜひキープし、風を起こす人になって欲しい。そういう人が福井にとってありがたく、求められていると思う。福井にも良くて守るべき部分と変えることを期待している部分があり、ぜひ、それを探していただきたい。

以上